Information

電子カルテを導入しました

2月28日（月）より電子カルテを導入いたしました。

連携医の皆様には、これにより特にご負担をおかけするようなことはございません。これまでどおり、患者様のご紹介をお願いいたします。今後とも、よりいっそう病診連携をすすめていく所存です。

どうかよろしくお願いいたします。

《電子カルテ導入リハーサル風景》

⬅ 外来患者さまの再診受付機が更新されました。

⬇ 中央採血室スタッフの操作訓練の様子

地域医療連携室より

1．画像診断の予約方法の変更について

３月２８日より放射線科画像診断外来をしばらくの間、休止させていただきます。この間、各診療科において、診療予約と合わせての画像診断を承ります。

2．担当師長が交代いたします

これまで、地域医療連携室師長として、連携医の皆様にお世話になった八垣が定年のため退職いたします。後任は、次号にてお知らせいたします。地域医療連携室の体制は、これまでと代わりません。引き続きよろしくお願い申し上げます。

患者様のご紹介・検査予約・お問い合わせについては

地域医療連携室

☎083 224-3860 FAX083 224-3861

編集後記

まず表紙に玉稿賜りました飴山院長先生に、日頃のご厚情とともに感謝いたします。「患者さんに寄り添う」初心は全ての臨床医に通じるものと拝読します。続くご報告で地域がん診療連携拠点病院として、がん化学療法看護を学び「患者を置き去りにしない看護」とされる言葉も重みがあります。巻末にご案内する電子カルテ導入は、地域の先生方に内視鏡画像なども取り込んだご返事ができると期待しています。その玄関としての地域医療連携室も現・新体制とも電話一本からご利用ください。

広報年報委員長　吉田　順一

ブリッジ

2011年（平成23年）2/15 Vol. 48

下関市立中央病院
広報年報委員会
〒750-8520 下関市向洋町 1-13-1
☎083-231-4111
FAX 083-224-3838
e-mail cokeieik@city.shimonoseki.yamaguchi.jp　ホームページ http://www.city.shimonoseki.yamaguchi.jp/byoin/

目次

● 連携医の声　あめやまクリニック　飴山　晶先生　1
●コラム　向洋の丘から　副院長　松尾　憲一　2
● 体験記　副主任看護師　平田　雅子　3
● Information　電子カルテを導入・地域医療連携室より　4

連携医の声

あめやまクリニック
院長　飴山　晶先生

「知命の歳」

菊川町にてクリニックを開業して、今年で丸十年を迎えようとしています。この間、下関市立中央病院の先生方には患者さんをご紹介いただいたり、急患を受け入れてくださったりと、何かとお世話になりました。私が自らのライフワークと位置づけております在宅緩和ケアの症例をご紹介いただいたこと、在宅医療についての症例検討会の開催にご協力いただいたこと、スタッフの皆様にお話する機会を与えていただいたことにも本当に感謝いたしております。

思えば平成１３年、まさに不惑の歳で開業を決意しました。医学部卒業後最初の２年間は麻酔科医として働き、３年目から外科医に転向しました。東京のがん専門病院で４年半腫瘍外科医としての専門教育を受け下関に凱旋（？）しました。外科医として身を立てていこうと日々仕事をしていたのですが、ある日、がんという病気にばかり目が行って、がんを抱えている「患者さん」という生身の人間に対する思いが欠如していることに気づき愕然としました。思案の中で、医師を志した頃の初心に帰って、「患者さんにより添う医者になりたい」というテーマを噛み締め生きていこうと決意しました。初心に帰るためにも敢えて菊川という郊外の地を選んで取り組むことにしました。

開業してからは慣れないことの連続で戸惑うことも多かったのですが、幸いなことに諸先輩方や仲間たちに助けてもらいながら、何とか続けてくることができました。介護システムや緩和ケアの重要性などを一つ一つ学びながら、おかげさまで今日までまっすぐに医者としての人生を続けてくることができました。今年、知命の歳となりました。天命を自覚するには至っておりませんが、これからの１０年も前を向いて、試行錯誤を重ねることと思います。中央病院の皆様、関係諸先生方にはこれからも何かとご迷惑をおかけするかと存じます。なにとぞご指導ご鞭撻のほど、お願い申し上げます。

コラム 向洋の丘から

「生身の体に刃物を当てることが認められた職業」

― 外科医背番号制の始まり ―

副　院　長
松尾　憲一

外科医は生身の体に刃物を当てることが法的に許されている唯一の職業である。だからこそ厳しい倫理観、学問的知識とともに、まさに外科医たる立脚点の手術を行なう優れた術（わざ）が求められる。と同時に手術成績に大きな影響を与える術前術後の繊細な患者管理を行なう力が必須である。術後管理がきちんとできなくしてメスを持つ資格はないと言ってよい。

これまでは医師の評判といっても権威ある公的証明・客観性の無い評判であった。組織として新しい方法をアピールして積極的に行なっているからといって専門的見地からは良い手術を行なっているとは決して言えない場合があるし、学会で権威を誇っている医師の実際の手術はその下のスタッフが担っているという例もある。外部からはその医師の実力は見えない。本質的には、その外科医の実力は同じ現場で働いているスタッフしかわからない。全国的に名が知れているかどうかと実力とは、それほど強い相関は無いというのは言い過ぎではない。

そのような中で本年1月初めから、全国全ての外科医（脳を除く）の手術症例を逐一登録する制度（National Clinical Database：ＮＣＤ）がはじまった。言わば外科医背番号制で、全症例の手術情報、術中・術後情報などを含めて登録することとなった。

全国規模の有益な種々の疫学的データは言うまでも無いが、加えて診療施設のup-to-dateな実態、個々の医師の診療成績などが明らかになってくるのは間違いない。

外科医にとっては一面で厳しいが、一方で所属や地域格差に左右されずに実力が公的に評価される道が開かれることを意味する。将来的には、患者さんの目線での情報開示にも繋がり、全国的な外科診療システムの再構築も起こるかもしれない。

REPORT

６ヶ月を振り返って

副主任看護師
平田　雅子

当院は、がん診療拠点病院として、認定看護師の育成に力を入れています。今号では、前号に続き、6月から久留米大学認定看護師教育課程でがん化学療法看護を学んだ職員の体験記を掲載いたします。

久留米大学認定教育センターに、緊張と不安と期待とが渦巻きながら入学したのは６月でした。当初、半年は長いと感じられましたが、あっという間の６ヶ月でした。

経験の上に胡坐をかき、知識も技術も何も備わっていないことに気づき、自分がズタズタになった実習でした。期待に応えようとして空回りをし、応えられない自分にまた自分を見失っていく、その繰り返しでもありました。でもそんな自分を支えてくれたのは、クラスメートでした。そして諸先生方、実習場所で出会ったＣＮ(がん化学療法看護認定看護師)やスタッフの方、家族、その他色々な方に本当にサポートを受けて今の自分がいることを実感しました。自問自答する日々が続いていますが、ぶれない自分を持つその強さも学ぶことが出来ました。

私自身を振り返る半年でしたが、また、看護を振り返る時間でもありました。「患者を置き去りにしない看護」言葉で言えば簡単ですが、日々そんなつもりはなくても、気が付けば置き去りにしていることがありました。その人らしくできない患者が目の前にいるその時に、少しでも患者の意に添えるようにするにはどうすれば最善なのか、じっくり考えることができました。患者と共に何事も目標を決めてそれに向かっていくその必要性も、今更ながら学べました。患者の弱さも強さも感じ、指導ではなく支援し続けることで自己効力感が増すことも実感できました。

業務の合間を見て、励まし続けてくれた上司や先輩方、ご指導くださった先生方、６ヶ月という貴重な時間を与えてくださった自施設の環境への配慮、など感謝の気持ちでいっぱいです。周囲からの期待と責任に重みだけを感じるのではなく、サポートだと思い、ここで学べたことを基盤にさらに学びを深めていきたいです。

REPORT

平成２３年２月１９日開催
がん医療市民公開講座

「防げるのどのがん」

耳鼻咽喉科部長
平　俊明

平成２３年２月１９日に、当院主催のがん医療市民公開講座が開催されました。今回は「防げるのどのがん」と題して、九州大学大学院医学研究員耳鼻咽喉科学分野講師の中島寅彦先生をお招きして、耳鼻咽喉科領域のがんから咽喉頭部のがんの原因と予防を中心とした内容になりました。

この公開講座は、当院が地域がん診療連携拠点病院になってから年に２回行っているもので、今回は通算７回目になります。

前半は、私が喉頭がんについて２０分余りお話しました。予防には禁煙が大切なことと、嗄声が続く場合は耳鼻科で喉頭を見てもらうことが早期発見につながるといった内容でした。

後半は中島先生から「咽頭がんの原因・治療とその予防」と題して、約６０分間講演していただきました。上咽頭癌はEBウィルス、中咽頭癌はヒトパピローマウィルスと飲酒喫煙、下咽頭癌は飲酒喫煙が原因として考えられること。重複癌が多いこと。ビタミンAとカテキンが予防として有力であるが禁酒禁煙に勝るものではないことなどを中心とした講演でした。

今回は、１９２名とたくさんの市民の方に来ていただきました。連携医の先生方から患者さんにお知らせいただいたおかげだと思います。
ありがとうございました。

編集後記

甚大な被害をもたらした東日本大震災も一か月が過ぎました。困難な環境下での現地医療スタッフの奮闘には頭が下がる思いです。さて、今年も４月に入り多くの新しい医師を迎え入れました。フレッシュな気持ちを持って、連携医の先生方にお役に立てるよう頑張っていきますので、よろしくお願いいたします。地域医療連携室でも担当師長が柳生副看護部長に変わりました。装いも新たに出発しましたので、併せてよろしくお願いいたします。

地域医療連携室　坂井　尚二

ブリッジ

2011年（平成23年）4/15
Vol. 49
下関市立中央病院
広報年報委員会
〒750-8520 下関市向洋町 1-13-1
☎083-231-4111
FAX 083-224-3838
e-mail cokeieik@city.shimonoseki.yamaguchi.jp　ホームページ http://www.city.shimonoseki.yamaguchi.jp/byoin/

目次

● 連携医の声　細江クリニック　橋本　修 先生　1
●ご紹介　新任紹介　2
●コラム 向洋の丘　副看護部長　柳生　登志恵
●ご案内　副院長、事務局長の交代について　3
● Report　がん医療市民公開講座「防げるのどのがん」　4

連携医の声

細江クリニック

院長　橋本　修 先生

主に透析医療を提供する有床診療所であります細江クリニックを継承して丸9年を迎えました。この間、下関市立中央病院の先生方には患者さんをご紹介いただいたり、合併症の治療で引き受けていただいたり大変お世話になっております。

昭和５９年に産業医科大学を１期生として卒業し第一内科に入局、４年目から腎臓研究室に配属。以後、大学病院や北九州の関連病院で腎臓病と透析医療の臨床と研究に頑張ってきましたが、ご縁があって平成１４年４月から下関で頑張っております。理想の透析施設をめざして、施設の新築移転、自院での透析導入・バスキュラーアクセス作成、合併症患者さんの入院管理そして最後の看取り、オンラインＨＤＦ・長時間透析の推進、透析関連の学会や研究会での発表、等着実に実行してきましたが、究極の透析施設への道のりとしてやり残していることがあります。それは、患者さんに夜間睡眠中に８時間かけて十分な血液透析をおこなうオーバーナイト透析が施設内で可能となれば、究極に近づくと考えております。

こらからも、現実を踏まえて理想に近づけるよう努力してまいりますので、下関市立中央病院の先生方には何卒ご指導ご鞭撻のほど、お願い申し上げます。

■「中央病院非公開ホームページ」メール会員アドレス登録 について

常時、ご登録を受け付けますので、アドレス変更のご連絡や、
ご質問等もあわせてお気軽にお問い合わせ下さい。

Email cokeieik@city.shimonoseki.yamaguchi.jp

コラム 尚洋の丘から

地域医療連携室に着任して

副看護部長 地域医療連携室担当
柳生　登志恵

４月１日より、八垣師長の後任として、地域医療連携室を担当しております 柳生と申します。末永くよろしくお願い申し上げます。

以前より地域医療連携室の役割には注目しておりましたが、オリエンテーションを受け、その内容をより一層具体的に理解すればするほど、また、日々業務の中でさまざまなことを経験する度に、その意義の大きさを痛感しています。

まだまだ未熟で、連携医の皆様にはご迷惑をおかけすることも多々あるかと思いますが、迅速な対応、誠意ある対応を心がけて参りますのでよろしくお願い申し上げます。

地域医療連携室より

画像診断の予約方法の変更について

4月1日より放射線科画像診断外来をしばらくの間、休止させていただきます。

この間、各診療科において、診療予約と合わせての画像診断を承ります。

患者様のご紹介・検査予約・お問い合わせについては
地域医療連携室　☎083 224-3860　FAX083 224-3861

Information

副院長が交代いたしました。

平成２３年３月３１日付で副院長 松尾 憲一 が定年退職いたしました。連携医のみなさまには、永い間お世話になりました。なお、平成２３年４月１日付で副院長に４名が就任いたしましたので、今後ともよろしくお願い申し上げます。（　）内は旧役職名。

- 副院長　上野　安孝（心臓血管外科部長）
- 副院長　前田　博敬（外科統括部長）
- 副院長　坂井　尚二（内科系統括部長）
- 副院長　真弓　武仁（内科統括部長）

事務局長が交代いたしました。

平成２３年４月１日をもって山田事務局長が人事異動により転出し、吉田 初巳 経営管理課長が事務局長に昇任し、経営管理課長を兼務いたします。

新任紹介

４月１日より２０名の新任医師が着任いたしました。
どうかよろしくお願い申し上げます。

呼吸器外科

医長
井上　政昭

腎臓内科

医長
吉村　潤子

麻酔科

医長
平田　孝夫

泌尿器科

医長
岸　弓景

心臓血管外科

医長
恩塚　龍士

消化器科

医長
王寺　裕

外科

医長
鈴木　宏往

脳神経外科

医長
鳥巣　利奈

眼科

医長
登根　慎治郎

循環器科

医師
上田　仁

整形外科

医師
行實　公昭

外科

医師
裵　惺哲

耳鼻咽喉科

医師
藤　翠

整形外科

医師
石原　康平

放射線科

医師
重本　蓉子

腎臓内科

医師
岩田　菜津美

外科

医師
武居　晋

整形外科

医師
川口　雅之

研修医
前原　佳奈

研修医
清森　亮祐

Information

9／3(土)・4(日) 下関市立中央病院　講堂で開催

「緩和ケア研修会」のご案内

下関市立中央病院
第3回がん診療に携わる医師に対する

緩和ケア研修会

主　催：　下関市立中央病院
後　援：　下関市医師会

日　時：　平成23年　9月　3日(土)14:00～21:10
　　9月　4日(日)　9:00～17:30

場　所：　下関市立中央病院　2階　講堂
　　〒750-8520　下関市向洋町一丁目13番1号

定　員：　がん診療に携わる医師　24名
　　※応募者多数の場合は抽選とさせていただきます。

参加費：　無料　但しお弁当代・お茶代(2日分)として2，000円をいただきます。

内　容：　講義、ワークショップ、ロールプレイ等
　　(がん性疼痛等の身体症状および精神症状に対する緩和ケア、コミュニケーション)

申込方法：　申込用紙にもれなくご記入の上、以下のFAXまたはE-mail　でお申込ください。
　　下関市立中央病院経営管理課庶務係
　　TEL:083-224-3831　FAX:083-224-3838
　　E-mail: cokeieik@city.shimonoseki.yamaguchi.jp

申込締切：　平成23年7月27日(水)

すべてのプログラムを修了すると、
厚生労働省健康局長より
修了証が授与されます。

がん患者とその家族が早期から、切れ目なく緩和ケアを受けられるようになるために

The PEACE project

編集後記

まず玉稿を賜りました大先輩の太田敏郎院長先生に感謝申しあげます。「風雨に負けず今後もブリッジがますます強固になるように」との力強い励ましのお言葉にはたいへん元気をいただき有り難うございました。

久木山看護師の「宮古市災害支援の報告書」、特に診療所の鏡に貼ってあった言葉には感激しました。この報告書はまだまだ続く力作ですので連載の予定です。

最後に、平成１５年４月にブリッジ第１号を創刊し今回で５０号記念号、この間２ヶ月毎に継続して発刊できたこと、連携医・登録医の先生方のご支援の賜と改めてお礼申し上げます。

前田　博敬

ブリッジ

2011年(平成23年) 6/15
Vol. 50 記念号
下関市立中央病院
広報年報委員会
〒750-8520 下関市向洋町 1-13-1
☎083-231-4111
FAX 083-224-3838
e-mail cokeieik@city.shimonoseki.yamaguchi.jp　ホームページ http://www.city.shimonoseki.yamaguchi.jp/byoin/

目次

● 連携医の声　太田内科医院　太田　敏郎 先生　1
●コラム 向洋の丘　院　長　小柳　信洋　2
●ご案内　医療相談員　八垣　悦子　2
●Report　東日本大震災派遣活動レポート　看護部　久木山 久美子　3
●ご案内　第３回がん診療に携わる医師に対する「緩和ケア研修会」　4

連携医の声

太田内科医院

院　長　太田　敏郎 先生

「ブリッジによせて」

医局長の出張命令で私が初めて郷里の市立中央病院の門をくぐったのは、入局直後の１９５７年の初夏でした。子供の頃は避病院として傍を通るのも恐れていた所で思いもかけず医療の修業を積むことになったのです。病舎は古い木造でしたが、スタッフはみな若くて活気がありました。亀田現名誉院長はじめ四宮、西川、徳永、森等々錚々たる諸先輩方の薫陶を受けましたが、昼食時には医局で亀田元陸軍軍医大尉のビルマ戦記をよく聞かされました。毎日のことで少々辟易したことを覚えています。

旧式の心電計やＸ線装置以外、ＣＴ、ＭＲ等の便利な機器は何もなく、いきおい診療は問診や聴打診中心でしたが、これは今でも大切なことだと思います。直接手で触れてもらうことで患者さんの信頼感はずいぶん増すようです。

１９６２年に正式に就職し、１０年を経て７２年に開業し今日に至っています。なにも特技がなく、ただ交通整理的診療を続けてきました。むろん中央病院の皆様にも随分お世話になりました。診療情報提供書の束がそれを物語っています。

齢８０近くになると、どうしても身体各パーツが故障がちになり、好きな釣りや旅行などもしばらくご無沙汰しています。ただお酒だけは今でも友達付き合いを欠かしません。長年の友情に免じてまだ当分は付き合ってやるつもりです。

巷には東北大震災、放射能汚染、政治の混迷等々胸苦しいニュースが溢れています。医療の将束も私如きにはわかりませんが、雨風に負けず今後もブリッジがますます強固になるよう期待しています。

患者様のご紹介・検査予約・お問い合わせについては
地域医療連携室
☎083 224-3860　FAX 083 224-3861

コラム
向洋の丘から

50号記念号に寄せて

院　長　小柳　信洋

平成１３年４月、下関市立中央病院へ赴任して丸１０年が過ぎたところです。病院広報誌のなかった赴任当時、病院機能評価機構の受審のためにも必要ということで連携医の先生方を対象とした「ブリッジ」、病院職員の相互連絡のための「スクラム」そして一般市民を対象とした「ふくふく通信」の３広報誌を同時に立ち上げた次第でした。以来今回５０号記念号ということでなかなか感慨深いものがあります。「ブリッジ」は見開き４ページの小冊子ではありますが、その原稿作成から編集・発行には結構の手間と時間が掛かる物であり、この仕事に携わってきた職員の皆様方には紙面を借りて心より御礼申し上げます。

来年４月より当院は「下関市立市民病院」という新しい病院名のもと一般地方独立行政法人となります。病院の独自性・自立性が従来以上に認められる半面、その経営責任も基本的には病院が負うこととなります。連携医・登録医の先生方のご協力なくして新体制化での病院の運営が立ち行かないことは明らかです。今後ともなお一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

医療相談員を増員しました

医療相談室に着任して

医療相談員　八垣　悦子

私は、2002年5月から今年の3月まで長岡、坂井両医師の指導のもと、地域医療連携室を運営させていただきました。運営の基本方針は、「速やかな対応」ということでした。方針どおりにならないこともありましたが、長く勤めることができたのも連携医の諸先生方のおかげだと感謝しております。

この5月から気持ちも新たに医療相談室に勤務しています。医療相談（医療費に関すること、転院・退院支援等)、がん相談（がん拠点病院の使命）が主な仕事です。森口相談員の下で少しでも早く一人前になれるように努力いたします。今後ともよろしくお願い申し上げます。

■「中央病院非公開ホームページ」メール会員アドレス登録　について

常時、ご登録を受け付けますので、アドレス変更のご連絡や、
ご質問等もあわせてお気軽にお問い合わせ下さい。

Email　cokeieik@city.shimonoseki.yamaguchi.jp

REPORT

先日の東日本大震災で犠牲になられた方々に心よりご冥福をお祈りいたします。
下関市では、さまざまの分野で宮古市へ職員を派遣しています。
今号から当院から派遣された職員の活動リポートを連載いたします。

「今回の被災支援に参加させていただき、本当にありがとうございました。あの悲惨な光景を忘れることなく、東北の方の力強さを見習い、日々の業務に活かしていきたいと思います。」

小児病棟　看護師
久木山　久美子

災害支援を終えて思うこと

～　宮古市災害支援の報告書より(1)～

今回の支援地、岩手県宮古市田老町は、さまざまな乗り物を乗り継ぎ、半日かけてやっとたどり着ける程の遠い所で、途中の景色は山側だったので満開の桜が咲き新緑に包まれ、遠くには雪の積もった山も見え、とても美しい所でした。しかし田老市役所に近づく頃には少し様子が変わり、交通事故車かと思う程、原型を留めない車が何台も放置され、市役所の1階はベニヤ板で被われ、そこで受けた説明で「最近は身体の一部が出てきているので手洗いをしっかりして感染に注意して下さい」と言うものがあり、一気に身の引き締まる思いがしました。それでも震災から一ヶ月が経っていたので、大きな瓦礫などはだいぶかたづけられ、グリーンピアへの道路は支障なく車で走れる状態でした。「グリーピア三陸みやこ」は広い敷地に、ホテル・体育館・アリーナに温泉などの施設のある、山の中の保養所のような施設で、ここからの景色を見る限り地震や大津波は嘘の様でした。

私達８班は保健師・事務職・看護師の三人のグループ編成で、主な仕事はアリーナやホテルに避難している人達の、健康管理をする事であり、宮古市の保健師の代わりに健康チェックを行いながら、被災者の話を聞く事でした。被災した人達は思ったより落ち着いて笑顔が多かったのですが、個別に話を聞くとやはりどの人も壮絶な体験をしていました。命からがら逃げて、殆ど何も持ち出す事が出来ずに、何かを取りに帰って命を落とした人も多くいたそうで、一ヶ月が経ち今頃になってようやくその頃の話が出来る様になったのです。

宮古市には自衛隊をはじめ、さまざまな形の支援者が沢山入っており、被災した人達の力に少しでもなれたらと言う思いが目に見える様に伝わってきました。思いが同じならこんなにひとつになれるんだと感動し、その一員になれた事に感謝したいと思います。グリーンピアのホテルに仮住まいしている診療所のスタッフの殆どは家を失い、家族を失った被災者であり他の被災者と同様に、小さなおにぎりの半分で一日を過ごし、飢えや寒さと戦いながらみんなを気遣い、やっと今診療所として機能する様になってきたのです。食事の時などに診療所の先生が、震災当初の悲惨な状況を話しながらも「でも電気ポットが使える様になった時はこれで温かい物が食べられると感動したな」とも話してくれ、絶望の中のわずかな希望を諦めない強さには頭が下がる思いがしました。

一度診療所の看護師が早朝に全壊した診療所や、大津波に飲み込まれた町を車で案内してくれたのですが、海側の町はほぼ全壊で廃墟の様に残った建物があるのに、海はＴＶ映像で観た真っ黒なものでは無く、とても青く美しい海でした。案内したくれた看護師は１ヶ月経って初めて海を見る事が出来たと言っていました。私達が居た間にも震度３の余震が２度あり、あんなに怖い経験をした人達はどんな思いをしているのだろうと心配になりました。

（次号に続く）

ホテル内の仮設診療所の鏡に貼ってあった言葉

燃えつきを防ぐ!!

・相棒をつくる
・自分の限界を知る
・ペースを守る

NEWS

9月1日より

画像診断外来を再開します

担当：放射線科医師　重本容子

９月１日より画像診断外来を再開いたします。どうぞ連携紹介をお願いいたします。
また、診療科外来での画像診断も従来どおり行っています。あわせてご利用ください。

画像診断外来日

◎月曜日の午後　◎木曜日の午前

① 受診の際は、同封の検査依頼・問診票（コピー可。当院ホームページからもダウンロードができます）が必要です。ご理解・ご協力のほどよろしくお願いいたします。

② 画像データ（電子データ）と報告書は、翌日郵送で発送しますので、検査結果の説明は、紹介医さまでお願いいたします。

ご不明な点、ご相談は、まず、当院地域医療連携室に！
☎ 083-224-3860

患者様のご紹介・検査予約・お問い合わせについては
地域医療連携室　☎083 224-3860　FAX083 224-3861

編集後記

残暑お見舞い申し上げます。３ページに看護師が報告する３月の震災で、全国的に節電の影響か、熱中症が多い感じです。さて表紙で、岡崎院長先生に玉稿賜り感謝です。地域がん診療連携拠点病院として１、２ページにご案内する行事が予定され、奮ってご参加お願いします。また４ページでご案内する画像診断外来は、今後も充実したく、先生方のご要望をお伝えください。

なお来春の独立行政法人化を目指し、当委員会の編集する病院公式サイト
http://www.city.shimonoseki.yamaguchi.jp/byoin/
もアドレスから一新する予定です。ネット上も先生方のご要望に答えるべく、ご指導お待ちします。

吉田　順一

ブリッジ

2011年（平成23年）8/15　51
下関市立中央病院
広報年報委員会
〒750-8520 下関市向洋町 1-13-1
☎083-231-4111
FAX 083-224-3838
e-mail cokeieik@city.shimonoseki.yamaguchi.jp　ホームページ http://www.city.shimonoseki.yamaguchi.jp/byoin/

目次

● 連携医の声　岡崎放射線科胃腸科内科医院　岡崎　正道 先生　1
●コラム 向洋の丘　副院長　上野　安孝　2
●ご案内　がん医療市民公開講座のお知らせ
●Report　東日本大震災派遣活動レポート　看護部　松吉　美由紀　3
●ご案内　画像診断外来の再開のお知らせ　4

連携医の声

岡崎放射線科胃腸科内科医院
院長　岡崎　正道 先生

私が、下関市立中央病院にお世話になったのは、昭和２９年、まだ医学部一年生の頃からです。夏休みに帰省すると、父から「中央病院の亀田先生のところで勉強をしてくるように」、と言われたのが始まりです。「まだ学部の一年生なので検査を勉強しなさい。」とのことで、当時の渡辺技師長からいろいろ教えていただいたことを思い出します。古きよき時代でした。

昭和３１年に肺結核で九大放射線科に入院、遅れて３５年に卒業、インターン後３６年に九大放射線科に入局。昭和４６年国立小倉病院に出向中、下関市立中央病院にリニヤックが入る予定とのことで、昭和４８年に中央病院に就職しました。やがて、立派な設備が出来上がりました。その頃では、最新の装置で、九州がんセンターや九大放射線科の同僚や後輩達が見学に来ました。放射線治療に貢献できたのではないかと思っています。

昭和５２年に父が他界し、後を継いで開業しましたが、父は外科でしたので専門分野が異なり戸惑いを感じられた患者さんもおられたようです。

その後も下関市立中央病院の皆様方には、公私にわたり大変お世話になり深く感謝しております。

Information　がん医療従事者研修催会開催　～「がん看護」研修～

がん診療に携わる医師等の放射線療法の知識等の習得のための研修会を開催いたします。本研修会は、「がん診療連携拠点病院の整備に関する指針」（厚生労働省健康局長通知）の改正に伴い、地域がん診療連携拠点病院として開催するものであります。
多数ご参加いただけますよう、ご案内申し上げます。

日時　平成２３年１０月１７日（月）１７:４５～（１時間程度）
場所　下関市立中央病院　２階講堂
講師　有賀　美佐子（下関市立中央病院　放射線科医長）
申込み　事前申込不要（当日直接お越しください。）

問い合わせ　経営管理課経営企画係　担当:川上　TEL:083-224-3835　FAX:083-224-3838

コラム 向洋の丘から

副　院　長
上野　安孝

3.11東日本大震災の日、テレビの臨時ニュースで流れる津波の映像は誠に衝撃的でした。押し寄せる海水が建物、樹木、車、人々を飲み込んでいく様、更には、原子力発電所の爆発の模様は、有無を言わさぬ現実を見る者に突きつけました。亡くなった方々の無念と被災された方々の苦しみは計り知れません。深く哀悼の意を表するとともに、お見舞い申し上げます。あれ以来日本では経済も政治もかつてない程落ち込んでいます。しかし、嘆いてばかりは居られません。遠く離れた場所にいる我々は現場に行って手伝うこともままなりません。それよりもここは大いに働いて消費して税金を払うことこそが、間接的ではありますが、お役に立てる方法ではないでしょうか。

ところで院内の話題になりますが、2年前に2名に減っていた当院の循環器科が、徐々に増員して今年度より4名となりました。かつて急患対応ができず、ご迷惑をおかけした時期がありましたが、いつでも急患の受け入れが可能となりました。いつでもご遠慮なく心血管疾患が疑われる患者様をご紹介下さい。心臓血管外科ともども、よろしくお願い申し上げます。

平成２３年度　第一回がん医療市民公開講座のお知らせ

当院の市民公開講座も８回目となりました。みなさまお誘いあわせの上、ご来場ください。お待ちしています。

講師：信友　直子 氏
（フリーテレビディレクター）

ニューヨーク・フェスティバル2011で銀賞獲得！
「おっぱいと東京タワー」

４３歳で子宮筋腫のため子宮摘出。４４歳で列車事故に遭い骨盤骨折。４５歳で乳がんを告知される。

乳がん闘病のようすを密着した映像を中心に、「私」の心の軌跡を「私」自身が語る一人称形式で描いた作品。

REPORT

災害活動レポート　Ｎｏ.２

先日の東日本大震災で犠牲になられた方々に心よりご冥福をお祈りいたします。

下関市では、さまざまの分野で宮古市へ職員を派遣しています。

今号は、当院からの派遣職員の活動リポートＮｏ.２です。

救急センター
松吉　美由紀

災害支援を終えて思うこと　～ 宮古市災害支援の報告書より(2) ～

「うそだーうそだーあり得ねえって、ただ見てたー」「走って走って、振り向いたらガレキの山だったーおっそろしかったよー」

３月１１日の津波の話です。田老の町の１０ｍの堤防を３０ｍ以上の津波が襲い、黒い波が家も仕事も家族も持って行ってしまいました。６月１８日に田老地区１５２名の合同葬儀と１００日法要が行われ、私たち下関班も救護員として参加させてもらいました。半数以上の遺体は見つからないままです。喪服も支援物資の中の一つだと聴きました。大きな悲しみはずっと続いており、被災者の一人ひとり、その家族一人ひとりにさまざまな忘れられない津波の記憶があるのだと思い知りました。

私たち１４班が活動した時期は、震災から３カ月が経ち、被災者はアリーナの避難所から仮設住宅に移った時期でした。災害サイクルからみれば亜急性期を過ぎ慢性期へ移行しているのですが、まだまだ環境が変化している時期で、災害ストレスに対する反応経過でいう「ハネムーン期」被災者同士の他愛的感情が高まり、助け合いの精神が発揮される時期です。さらに時間が経過すると、個々の生活を再建するために多くの課題が明らかになり、それを解決していかなければならず、被災による疲れもピークになります。避難所からでて仮設住宅に移り自立性が増すとともに、苛立ちや無力感、悲しみを経験する「幻滅期」を迎えることが考えられました。

主な活動であった仮設訪問では、健康チェックを行い、身体機能の低下はないか、心のケアが必要な人はいないかのスクリーニングをして、地元保健師に情報提供を行い、心理士や診療所と連携をはかりました。避難所では聴けない個人個人の思いに直面することも多くありました。信じがたい話に私が出来たのは隣に座ってうなづき話を聴くことでした。ただ、心理士から「共感的応答をした後は、これから何をするのか、食事のおかずを聴いてもいい、必ず現実にもどしてあげてください」。仮設入居はコミュニティーづくりがしやすいように、田老の地域別としてあります。入居当初は「みんな一緒だから安心」という言葉をよく聞き、顔見知りの環境が仮設での生活への不安を和らげていたと思います。入居2週間ほど経過すると、与えられるだけじゃなく、自分たちで何かしたい」、集会揚を使いたい」など私たちに訴える人も出てきて、自立に向けて前に進もうとしている人もいましたが、中には引っ越しの片づけが終わってしまうと、「何もすることがない」「まだ何も考えられない」と訴える人もおり、「仮設に入ってさみしい」など被災者間の格差も出現しはじめました。健康教育の実施など身体面の援助とともに、自立支援の取り組みのために地域町内会や関係団体等の連携・調整が必要となること、精神面の継続性援助が重要であることを感じました。

私たちはたった2週間の短い支援期間でしたが、下関市は震災後の3月末から、支援活動を行っています。避難所にいた保健師や看護師のことを覚えていてくれて、「下関市」のゼッケンを付けていた私にも、多くの人たちが声をかけてくれました。また、他県の多種職に亘る支援者たちとの関わりも忘れられません。

この東北の地に震災の恐怖に立ち向かい、新しい生活を受け入れようと頑張っている人たちがいること、さまざまな形で支援を行っている人たちがいることを忘れてはいけない、この現実を多くの人に知ってほしいと思います。支援とは、「援助することではなく、土地の人の思いに寄り添って、土地の人と一緒に考えて動くこと」であると国愛なき医師団の心理士が話していたことを思い出します。田老の人たちの思いに寄り添って、長期的な支援が続いてほしいと願います。

研修会報告

第３回
がん診療に携わる医師に対する緩和ケア研修会

緩和ケア外来　主任看護師　和田 恵子

厚生労働省は、緩和ケアのすみやかな普及のために、がん対策基本法に基づくがん対策基本計画(2007年6月15日閣議決定)　において、「すべてのがん診療に携わる医師が研修等により、緩和ケアについての基本的な知識を習得する」ことを目標に掲げられ、2008年４月１日に厚生労働省健康局長通知「がん診療に携わる医師に対する緩和ケア研修会の開催指針」が出されました。

これを受けて、地域がん診療連携拠点病院である当院は、９月３日(土)、４日(日)の２日間、第３回緩和ケア研修会を開催いたしました。

研修内容は、厚生労働省から出された、緩和ケア研修用のPEACEプログラムで用意されているプレゼンテーションを使用しています。緩和ケアの概論、がん性疼痛の評価と治療、がん性疼痛の事例検討、オピオイドを開始する時、呼吸困難、消化器症状、気持ちのつらさ、せん妄、コミュニケーション技術や対応方法について、地域連携と治療・療養の場の選択など、講義・討論・グループワーク・ロールプレイなど参加型の研修会です。

今回は、開業医の先生方や、関門医療センター 、済生会下関病院、市立中央病院などの勤務の先生方、計１２名と中央病院緩和ケアチームも加わりました。

終了後のアンケートでは、「ロールプレイなど非常に有意義であった」「いろいろ勉強になった」という反面、「コメディカルにもっと広げて行って欲しい」と、次回に向けての改善策もありました。

緩和研修会は、基本的には、医師のための研修会です。しかし、本来緩和ケアは、医師のみが行うケアではなく、多職種でのチーム医療が必要です。また、緩和ケアの研修会の参加者の中からも、多職種化に対する要望は多かったです。

研修の運営には、現在も多くの看護師やコメディカルスタッフが協力していますが、職種に必要な基本的知識を学習しつつ、専門領域の教育も必要だと思っています。

今後中央病院では、さらに内容を充実させ、今後も開催して参りますので、がん診療に携わる多くの先生方のご参加をよろしくお願い申し上げます。

編集後記

今年３月の東日本大震災、原発事故、また台風や大雨による災害と自然の猛威と人災の恐ろしさを思い知らされました。下関は災害の少ない都市といわれています。しかし、これが防災に対する意識、備え、危機管理にはむしろ逆に弱点になるのではと危惧されます。病院は自然災害ばかりでなく、重大な感染症等多くの災害に対応していかねばなりません。

「備えあれば憂いなし」という言葉があるように、個人、地域、各組織でもう一度防災について見つめ直す必要があると思います。

坂井　尚二

ブリッジ

2011年（平成23年）10/15　52

下関市立中央病院
広報年報委員会
〒750-8520 下関市向洋町 1-13-1
☎083-231-4111
FAX 083-224-3838

e-mail cokeieik@city.shimonoseki.yamaguchi.jp　ホームページ http://www.city.shimonoseki.yamaguchi.jp/byoin/

目次

● 連携医の声
特定医療法人茜会　吉水内科　諸冨　夏子 先生　1
●コラム 向洋の丘
副院長　真弓　武仁　2
●Report
災害派遣医療チーム（DMAT）の演習　3
●研修会報告
第３回緩和ケア研修会　看護部　和田　恵子　4

連携医の声

特定医療法人茜会　吉水内科
院　長　諸冨　夏子 先生

下関市立中央病院の先生方、スタッフの皆様には平素より格別のお引き立てをいただき、ありがたくお礼申しあげます。

当院は「地域医療への貢献」を理念として、患者様から親しみを持って気軽にご来院、ご相談いただける「かかりつけ医」を目指し、日々の診療を行っています。

とくに昨今では在宅医療に力を入れ、在宅療養支援診療所として通院が困難な在宅患者様の日々の療養管理から看取り等を通して、地域の皆様の期待に応えるべく取り組んでいるところです。在宅医療においては病診連携が重要であり、当院としましてもその連携構築を重要な課題としていますが、下関市立中央病院様には在宅医療に限らず、患者様のご紹介から緊急時のご対応等で多大なご支援、ご指導をいただいており、日々感謝いたしております。

当院も平成２３年９月３日をもちまして開院２５周年をむかえることができました。今までの各方面からのご厚情に感謝するとともに、今まで以上に「地域医療への貢献」という想いをスタッフ一同強く心しているところです。

下関市立中央病院の皆様には今後もお力添えをお願いすることもあると存じますが、何卒お引き回しのほどよろしくお願いいたします。

Information

画像診断外来ご利用ください

９月より画像診断外来を再開しています。どうぞ連携紹介をお願いいたします。
また、診療科外来での画像診断も従来どおり行っています。あわせてご利用ください。

画像診断外来日

月曜日の午後　木曜日の午前

① 受診の際は、同封の検査依頼・問診票（コピー可。当院ホームページからもダウンロードができます。）が必要です。ご理解・ご協力のほどよろしくお願いいたします。
② 画像データ（電子データ）と報告書は、翌日郵送で発送しますので、検査結果の説明は、紹介医さまでお願いいたします。

ご不明な点・ご相談は　まず、当院地域医療連携室に！　☎ 083-224-3860

コラム 尚洋の丘から

副　院　長
真 弓　　武 仁

登録医の先生方には、いつも大変お世話になり、感謝しております。当院では、来春の独立行政法人化に備えて、様々な改革が行われていますが、その一つに、外来患者さんの御紹介があります。病院事業部から参事さんが病院に来られて推進されていますので、最近は、少し強引に御紹介していますが、その際、いろいろと気付かされたことがあります。

一つは、患者さんは、様々な理由で当院を希望されていたということです。総合病院なので、「他の科も一緒に同じ日に受診できる」という理由は理解できますが、「近くの先生にかかると、一週間ごとに来院させられる」というような、本当かなと思う理由を言われる人もおられます。「足が悪いので、近くの医院へ歩いて行くよりは、目の前のバス停からバスに乗って病院で降りたほうが楽だ」と言われるかたもおられますし、「近くの人と医院で会いたくない」という変わった理由を言われた人もいました。それでも強引に紹介しようとすると「３時間でも４時間でも待ちますから、ここに置いて下さい」と言われたり、「他へ行けと言うのなら薬をやめます」と言われたこともありました。病診連携や紹介率の話をして説得するのですが、一部の患者さんについては断念せざるを得ないこともあります。

特に、御高齢のかたがショックを受けた時は、それ以上、話をするのを控えています。このような事態となると、実は、強く希望されて当院を受診して頂いていたのだと、感謝の気持ちで一杯になります。外来日に一人御紹介しても、週４人、１カ月で１６人、１年で２００人。

６００数十人外来患者さんがおられるので、本当に先は長いという感じです。

患者様のご紹介・検査予約・お問い合わせについては
地域医療連携室
☎ 083 224-3860　FAX 083 224-3861

REPORT

災害派遣医療チーム(DMAT) が演習に参加

救急の日(９月９日)を前に下関市中央消防署は９月８日、列車で異臭が発生したと想定し、乗客らを救出する訓練をＪＲ下関駅で行いました。

消防やJR職員等総勢約１００人が参加するという大掛かりな訓練でした。これに、当院の災害派遣医療チーム（ＤＭＡＴ）が参加いたしました。現場では、ＪＲ社員が消防に通報し、後方車両の乗客をホームに作った救護所に誘導。消防隊員は化学防護服などを装着し、異臭が発生した先頭車両から倒れた乗客を搬送し、服についた原因物質を洗い落とす除染を実施し、ＤＭＡＴチームの医師らが救命処置を施すという内容の訓練が行われました。

終了後、新久保克己署長は、「多数の負傷者が出た場合は、ＪＲやＤＭＡＴとの協力が重要。今後も連絡強化を図りたい」と総括。大田茂生下関駅長は、「訓練の経験を生かして、あらゆる場面に対処できる準備をしておきたい」と話されました。この模様は、新聞(９月９日 読売新聞)にも取り上げられました。

当日参加したＤＭＡＴ隊員は、篠原外科部長、手術室・小林師長、５西・保村看護師、4東・飯垣看護師です。当院のＤＭＡＴチームは、毎年、このような訓練に参加し、実際の災害に備えています。

ＪＲ下関構内における救命処置訓練

倒れた乗客の搬送訓練

がん医療市民公開講座

「見る・知る・わかる がん講座」
大腸がんの早期発見、早期治療

当院では、平成１８年８月２４日付で厚生労働省より「地域がん診療連携拠点病院」に指定されて以来、市民の皆様方に『がん』についての正しい知識と情報の提供を行うため、毎年市民公開講座を開催しています。

今年度２回目（通算９回目）の講座は「大腸がん」をテーマとして、予防、治療等についてのお話をします。Q&Aコーナーでは、皆様のご質問にお答えします。

２月４日（土）１４時から海峡メッセ１０Ｆ国際会議場にて参加資格なし、入場無料です。

ご家族、ご友人を誘ってふるってご参加ください。皆様のご来場を心からお待ちしています。

お問合せ　下関市立中央病院 庶務係　TEL 083-224-3831

立体駐車場建設について

患者様の駐車場不足を解消するため、立体駐車場の建設工事を行っています。来年３月２３日完成の予定です。２階建て３層構造で、第１、第２駐車場を合計しますと、駐車台数が２５８台となり、現在の約1.5倍に増大します。

ユニバーサルデザインの駐車場で、車いすが利用しやすい１１人乗りエレベータや、身障者用駐車スペースを入口近くに設置する等車いす・高齢者に配慮した他、入出庫口を分離し玄関前の混雑の緩和を図ります。また、LED照明の採用や太陽光パネルの設置など環境にも配慮いたします。

完成まで、ご不便・ご迷惑をおかけいたしますが、ご理解・ご協力をお願い申し上げます

編集後記

師走と申すのは医師も走ることか、先生方にも３月の大震災など御多用の１年だったことと拝察します。その折に本号表紙の玉稿賜り、木下院長先生に感謝します。弊院は災害拠点病院にてＤＭＡＴの報告、地域がん診療連携拠点病院にて年明けの市民公開講座のご案内をしています。また立体駐車場も竣工を控え、患者様へも利便向上に努めています。

どうか来年も患者様についての病診連携など御厚情賜りますようお願いします。

吉田　順一

ブリッジ

2011年（平成23年）12/15　53
下関市立中央病院 広報年報委員会
〒750-8520 下関市向洋町 1-13-1
☎083-231-4111
FAX 083-224-3838
e-mail cokeieik@city.shimonoseki.yamaguchi.jp　ホームページ http://www.city.shimonoseki.yamaguchi.jp/byoin/

目次

● 連携医の声
医療法人愛の会　光風園病院　木下　毅 先生　1
●コラム 向洋の丘
副院長　前田　博敬　2
● Report
ＤＭＡＴ隊活動報告／ＪＲ西日本合同防災訓練　3
● CLOSE UP
がん医療市民公開講座・立体駐車場建設について　4

連携医の声

医療法人愛の会　光風園病院
院　長　木　下　　毅　先　生

「リハビリテーションの充実を目指しています」

光風園病院は昭和１５年に光風園療養所として開設され、結核の治療を行っていました。昭和５２年に私が院長となり現在は回復期リハビリテーションと慢性期の患者さんの治療を行っています。市立中央病院には患者さんのご紹介や急変時の転院など日頃から大変お世話になっています。

光風園病院は自然環境にめぐまれています。光には、目だけでなく、心にも感じられるものがあり、患者さんの不安や戸惑いを「足元を照らす暖かな光」で導き、緑いっぱいの風には、私たちが、ケアの質の向上を目指し、決してよどむことのない「新しい風」をさわやかに送り続けていこう、という思いが込められています。

医療の機能分化が推し進められ急性期を担当する市立中央病院の役割はとても大きくなっています。当院は急性期後の亜急性期、回復期、慢性期の治療・ケアには自信を持っています。責任を持ってお引き受けし、在宅に向けてのリハビリテーション、長期療養、介護保険施設の利用などの道筋をつけてゆきます。

当院のもう一つの特徴は医療とケアとリハの連携プレーです。よくお年寄りが肺炎や、骨折すると寝たきりになってしまうと言われていますが、適切な時期に必要なリハビリを行えば回復可能です。脳卒中後のリハビリテーションにも力を入れています。多くのスタッフがチームを組みこれからもリハビリ機能の充実、チーム医療の充実に取り組んで行きますのでよろしくお願い致します。

Information　画像診断外来ご利用ください

９月より画像診断外来を再開しています。どうぞ連携紹介をお願いいたします。
また、診療科外来での画像診断も従来どおり行っています。あわせてご利用ください。

画像診断外来日

月曜日の午後　木曜日の午前

担当：放射線科医師　重本容子

① 受診の際は、検査依頼・問診票（コピー可。当院ホームページからダウンロードができます。）が必要です。ご理解・ご協力のほどよろしくお願いいたします。
② 画像データ（電子データ）と報告書は、翌日郵送で発送しますので、検査結果の説明は、紹介医さまでお願いいたします。

ご不明な点・ご相談は　まず、当院地域医療連携室に！　☎083-224-3860

コラム 向洋の丘から

副院長
前田　博敬

東日本大震災直後の津波による未曾有の災害を震災直後テレビの画面で目のあたりにして、自然災害の猛威に驚嘆し恐怖を感じたのは私だけではないと思います。

あれから８ヶ月が経過し、大震災と津波に加え福島の原発事故がさらに人々を困惑させています。心の傷を抱えつつ毎日の生活の中で原発による被害がさらに追い打ちをかけているようです。

特に、妊産婦さんは、自分自身の心因的な不調より、お腹のこどものこと、母乳中の放射性物質をも含めた出産後のこどもへの影響などを大変に心配されていると思います。このことが産婦人科医としての一番の憂いです。

自然災害は、時間の経過とともに被災地が復興していけば徐々に忘れていけるのかもしれませんが、原発の被害はこれから何十年も毎日の生活のなかで付き合っていかなければならず、忘れたくとも忘れられないものとなりそうです。

昔から世の中で怖いものの代名詞といえば、『地震、雷、火事、親父（台風）』。すべてが自然災害でありますが、これからは『地震、雷、火事、親父、原発』になるかもしれません。自然災害以外の人工的な構造物による災害、人間が作ったものでありながら制御不能の恐ろしさ、終息までの期間の長さは自然な災い以上であることを改めて実感させられました。

クリスマスデコレーション

今年も中央病院にクリスマスデコレーションがお目見えしました。
院内のあちらこちらで楽しいクリスマスの風景がご覧になれます。
読者の皆様は、いくつ発見できるでしょうか。

REPORT

前号に引き続き当院DMAT隊の活動をご紹介します。

DMAT 隊活動報告

JR西日本合同防災訓練

看護師（日本DMAT隊員）
保村　宏樹

１１月７日ＪＲ西日本主催の合同防災訓練に参加してきました。JR職員による初動救護から消防によるトリアージ、医療班による救命治療、搬送までの一連の流れを行いました。

今回の訓練では、下関警察署、下関中央消防署、水上警察、関門医療センターDMAT 、済生会下関総合病院DMAT、当院のDMATと関係職種が多数集まり、充実した訓練が行われたように感じます。当院のDMATカーは初登場でしたが、赤色灯を廻し、サイレンを鳴らして派手にアピールしてまいりました。（サイレンの音は消防車にも負けていません）

訓練の内容は、列車と普通自動車の衝突事故で負傷者が多数出た、という設定でした。列車の中に閉じ込められた傷病者と車の中に閉じ込められた傷病者を救出、トリアージ、トリートメント(治療) 、トランスポーテーション(搬送)するといった内容でした。DMATが到着した時にはすでに１次トリアージは終わっており、列車の中に閉じ込められているカテゴリー赤の傷病者を治療するように指示され、列車の中に突入。経口挿管、血管確保などの処置を行い、すぐに医療機関に搬送しました。その後は列車から降りて、現場救護所での再トリアージや応急救護、重傷傷病者の救命処置などを行いました。

東日本大震災後、防災意識が高くなっており、訓練も充実したものになっているように思います。日頃から、警察や消防などと顔の見える関係作りをするためにも、今回のような合同訓練が必要であると感じました。

山口県は災害が少ない地域ではありますが、今回のような訓練を定期的に行い、有事に備えてできる限りのことをしておく必要があります。災害サイクルからみると、山口県は静穏期、準備期に当たります。今できる限りの準備をして減災に努め、有事の際には当院が中心になって医療活動を展開する。それが、災害拠点病院の使命であると思います。

また、他地域での有事の際にはDMAT隊の派遣にご理解、ご協力をお願いします。